

シリーズ
「景観文化考」第8回

S E R I E S

再生のデザイン力

L A N D S C A P E



中井 和子 (なかい かずこ)

中井景観デザイン研究室 代表

東京出身。筑波大学大学院環境デザイン専攻修了。(株)G.K.インダストリアルデザイン研究所(東京)勤務を経て、1975年～78年フランス政府給費留学生として、マルセイユ及びパリの国立美術大学で建築・環境デザインを学ぶ。1985年建築・環境デザインの研究所を設立し現在に至る。北海道教育大学・札幌市立大学・北海道工業大学の非常勤講師、『まちの色彩作法』(共著)、『農業・農村と地域の生態』(共著)、『北のランドスケープ』(共著)など。

歴史ある街並景観の趣は、古い建物と新しい建物が程よく調和するたたずまいである。古いだけの街では活気が感じられないし、新しいだけの街には、風景のなかに文化の蓄積と生活の奥行きを読み取ることができない。歴史・文化の存在は、街なかの人々の暮らしの場面で、護り・育み・活用されてこそ次世代に受け継がれていくことから、時代に呼応した形に修正を加えながら継承していくことが重要である。建築に関して言えば、石造やレンガ造の建築物が多い欧米の街や村では、必然的に建物の存在時間が長いことから、各時代の生活文化に呼応したりノベーションが盛んで、内部空間や建物外観の修復・改修工事に関する「再生のデザイン力」の水準の高さを実感する。特にヨーロッパでは歴史的建造物が美術館や博物館へと改修され、新たな価値が創出された施設も多い。

例えば、ロンドンのテムズ河畔にある2000年開館のテート・モダン、テートギャラリーの施設群の一つで20世紀美術の作品を展示するが、1981年閉鎖で放置状態にあった旧発電所の大規模建造物のコンバージョンである。また、パリのオルセー美術館は、旧オルセー駅の鉄道駅舎兼ホテルからのリニューアルで1986年の開館である。いずれも建物内部の特異な大空間の歴史的価値と雰囲気を残したまま、現代のデザイン要素を加味して再生されている。時間的経過を経た建築空間の荘重感と現在の絵画・彫刻展示が、相互に融合し引き立て合って素晴らしい空間である。建物外観は昔日の面影を残して復元されたことから、建物が存在する街並景観に慣れ親しんでいる人々の愛着心は満たされ、新築の建物では表現できない効果がある。古い建造物の存在価値を残しながら、新たな機能性を加味する「再生のデザイン力」が、これからは重要になってくる。有名な歴史的建造物だけではなく、地域住民が日常的に活用していた公共施設類や学校や工場などは、使用目的を変更して保存再生できる仕組みが必要



パリのオルセー美術館

である。地域の住民の心象風景に残る古い公共建築物が、現況の街並景観のなかに再構築される意義は大きい。しかも、用途は異なっても利用可能な状態で地域に復元される喜びは計り知れない。

先日、初冬の雪がうっすら積もる栗山町の雨煙別小学校を訪ねた。町中から三笠方面に向かう道道がゆっくりに左折する角地に存在することから、車の目線からもよく見える立地条件である。明治39年開校の小学校だが現存の木造校舎は昭和11年の建設で、現役の増毛小学校と同じ年の建設である。北海道に残る戦前の二階建木造校舎はこの2校だけである。雨煙別小学校は平成10年3月の閉校以来、校舎の保存・活用を求める地域住民の要望や意見交換がたびたび行なわれたが、財政負担の課題から結論が出ないまま10年近く放置され、荒廃の一途をたどっていた。しかし、コカ・コーラ教育・環境財団による1億8千万円の支援で、昨年約1年かけ自然・環境教育と文化・スポーツの体験学習の宿泊研修施設にリノベーションされた。平成20年5月設立のNPO法人雨煙別小学校による施設運営が始まったばかりである。

今回のリニューアルがユニークなのは、学校全体の再生デザインの設計を行った象設計集団が、地域住民の参加によるワークショップを昨年7月から8回も開催したことである。町内の老若男女の参加が延べ人数で約1,500人もあったそうで、外壁や内装等の塗装工事に熱心に取り組む様子がNPO法人のホームページに掲載されている。この体験を通して町民は、以前にも増して雨煙別小学校に愛着と誇りを抱いたことであろう。卒業生にとって小学校の校舎内には、昔日の懐かしい思い出があちこちに潜んでいる。実際に建物を訪れ内部を歩くことで、心の記憶が蘇るさまざまな糸口が見つかるに違いない。NPO法人雨煙別小学校の方々と、栗山駅で偶然お会いした79歳になる木造校舎1期生の森さんに校舎内をご案内いただいたが、お話

の端々に校舎への懐かしさと再生の喜びが感じとれた。重要建造物でもない普通の木造小学校であるが、再生のデザインで人々が集う楽しい場所へ改修されたことから、今後の活動と利用に大きな期待がもてる。NPO法人の活動に関しては、町が進める地域と大学との連携で、社会貢献型の体験活動学習を目指す桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部の協力も、雨煙別小学校の運営を後押しする。施設が整備されても通年の運営機能が持続できなければ維持管理が難しい。教育・文化・スポーツ分野等の研修・宿泊施設としての活用が、町の内外へ多面的に展開できれば、町にとっても有意義なことである。

小学校の存在は、地域住民のふるさと意識の中で大きな比重を占める。母校の閉校に対する衝撃と廃校により校舎までなくなるのであれば、その喪失感は大い。北海道の木造校舎のリノベーションでは、美唄市の旧栄小学校がアルテピアッツァ美唄へ再生した事例が著名である。アルテピアッツァ美唄は、古い木造校舎と安田侃氏の彫刻群が美しいランドスケープの景観を形成する、優れた再生デザインの事例である。

「デザイン力」とは新たな物づくりだけを意味するのではない。古い建築物を再生し新たな価値を創出する「再生のデザイン力」はもちろんのこと、住民参加のワークショップ等を通して、地域コミュニティ再生の関係づくりをデザインすることも可能である。地域のさまざまな「デザイン力」が、暮らしの文化として定着し地域のアイデンティティーとして結実したのが、歴史・文化が反映された景観である。既存の建物や場所等の地域資源を、従前とは異なる活用も視野に入れながら地域の中で再構築し、新しい価値を創出できる「再生のデザイン力」は、景観保全と地域文化再生が共生できる一つのデザイン手法である。

※写真撮影：筆者



雨煙別小学校



同廊下



アルテピアッツァ美唄に再生された旧栄小学校